
1 or 0

斎藤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 o r o

【Nコード】

N 8 8 5 7 X

【作者名】

斎藤

【あらすじ】

「お帰りなさい私の可愛い娘!」「よくぞ帰った我が娘よ!」「
せしむわゆるは?」
芹沢依。18歳。人間。もう一度言う。「人間」。魔王夫婦の子供
ではない。断じて。

テンプレ展開で呼ばれた勇者の筈の主人公は、行方不明だった魔王の一人娘でした。それどんな展開だよ。

「魔族め、よりもよって勇者様のふりをするとは何たることだ！我々を油断させ、皆殺しにする腹積もりであったのだろう！？」

「これは召喚魔術だぞ！？一体どうやって勇者様と入れ替わったというのだ！怪しげな魔術を使いおって！」

「ええい、とにかく早くこの魔族めをひっ捕らえよ！魔力を封じるのを忘れるな！」

「何と狡猾な……くそ、魔族め！汚い手を使う……！！」

一体何だというのだ、こいつらは。

人を突然拘束して、騒ぎ出して。お前らに突然責め立てられるような覚えはない。大体魔族だの勇者だのと、何を口走っているのだろう。猿轡さえされていないければ、どんな夢物語の住人だよと言って罵ってやりたい。

「どうやったかは知らぬが、魔王の命で我が王の命を狙ってきたのだろう、魔族めが。しかしこうして捕らえられた以上、それは敵わぬものと知れ！明日、国民の前で、貴様は公開処刑とする！せいぜい短い生を謳歌するが良いわ！」

いや、どちらかと言えばお前のその言い草の方がよっぽど魔族っぽいってどうか、悪役っぽいってどうかさ。

そんな私の胸中のツツコミを知ることなく、小さくてでっぷりとした貴族っぽい……いや、それよりもなんかこう、宰相的な大臣的な王様には一步届かない的な雰囲気のおっさんは、鉄格子越しにそう吐き捨てて、牢屋らしいこの場所を去って行った。猿轡に拘束具（ご丁寧に全て金属製）という、どう見ても囚人です本当にありがとうございませうみたいな状態の私を残して。

「(……どうしてこうなった)」

私は混乱以上に怒りを抱えながらも、灯りの一つも無い、真っ暗で冷たい石造りの牢屋で、ぼんやりとこうなった経緯を振り返ってみた。

まず、魔族魔族と連呼されていた私だが、魔族とやらになった覚えはこれっぽっちも無い。私は真正銘のホモサピエンス、つい1時間前までは普通に女子高生をしていた、芹沢依よるという日本人だ。小さい頃のあだ名は「よっちゃん」。イカか。

18年の人生を振り返れば、ラノベの主人公だとかイギリスの某有名魔法少年のように、両親と幼くして死に別れて親戚を盪回しにされたり虐待されたりという不幸な生い立ちだったとか、異常なまでに強調された平々凡々だったとか(大体自分を平凡っていう奴ほど平凡から遠いのもテンプレだ)、そういうことはない。今世紀始まって以来の天才だとか、元々特別な血筋云々だとか、物凄く可愛くて美人で人気者だとか、超絶金持ちの家だとか、あれば嬉しい厨設定も無い。どっちかというところ「変わってる」とか「おかしい」とか「病院に行け」とか言われてた、精神的に「残念」とか言われちゃいそうな方に近い(勿論、自分的には普通だったのだが、周りの評価がそんななんだったので、そう言い張るのを止めた)。

そんなテンプレ的主人公からは除外される私だが、どういうわけか下校中に突如頭上に現れた謎の魔法円によって召喚されるという、なんともテンプレな異世界召喚ぽいものをしてしまったようなのである。ただ、私自身が先に話したようにテンプレ主人公の枠から外れるからなのだろうか。召喚されてからすぐ、テンプレ展開は終わりを告げた。

召喚されたあの時、私は真つ暗な部屋の中心で、ぼかんとへたれこんでいた。想像してみたい、こうして振り返っている今は冷静だが、突然周りの風景が一変しているのである。これは驚愕を通り越して呆然我失もするというものだ。

私は「は？」と「え？」を繰り返し、自分を囲む魔術師としか言いようのない雰囲気の中のローブ軍団をきよろと見やり、儀式真つ最中ですみたくないな篝火を焚いた部屋を見回していた。周りの人達は確かこの時、「おお……！」、「成功だ！」「これが勇者か！」とか言つて、何か感動していた気がする。

ここまでなら素敵なテンプレ展開。これから王子なり姫なり王なり大臣なりが召喚された私に「おお勇者よ」みたいな風に近寄ってくるか、自分の身に起きたことに混乱して周りに説明を求めるのが王道なのだが、問題はここからだ。

何とか我に返つた私は後者を無意識に選択し、説明を求めて口を開きかけたのだが、何とその瞬間、突然どこからか防犯ブザーのような騒音が鳴り響いて、どう見ても緊急事態みたいな赤い光が、部屋の隅っこに置かれていた水晶玉っぽい物から放たれたのである。

それからは大混乱。私が口を挟む隙などなく、「魔族の反応だ！」「どこに侵入したというのだ魔族め！」「今すぐ全員素顔を見せろ！」「とか周りが騒ぎだして、でも私は何が何だか分からず呆けていて、そして3分くらい経つた時には、この場の全員が私を凝視していた。その意味は「もしかして、こいつじゃないか？」である。そしてそれは外れておらず、誰かが私の腕を掴んで何かぶつぶつ言つたと思うと、「こいつの魔力は黒魔力だ！魔族はこいつだ！」と大声で言つてきやがったのである。鼓膜破れるかと思つた。で、後は魔族うんたらと散々詰られ、猿轡と手枷・足枷を嵌められて牢屋にポイ。素敵な囚人スタイルの出来上がりだ。

「……………理不尽！」

怒りが湧き上がった私は、思わず手枷を床に叩き付けた。別にたかがこの程度でこれが壊れるとは思っていないが、やはり手枷は金属特有の甲高い音を立て、衝撃に震えただけだった。腕も痺れて痛いし痒い。畜生。

ていうか何だよ。私どう見ても可哀想なだけじゃん。被害者じゃん。勇者召喚って基本的に勇者の人権とか総無視していきなり呼びつけて魔王倒せっていうのが王道だけどさ、私その勇者ですらないってどうということ。かといって事故でもなく、明確にその目的で呼ばれたのにもかかわらず、いきなり魔族とかどう考えても人外呼ばわりした拳句に公開処刑？冗談じゃない！

「（あいつら絶対ただじゃおかない。でもその前にこの状況何とかしないと……）」

あのム力つく連中は絶対シメる。いや、この際異世界だし犯罪とか気にしないで絶対ぶち殺すとして、まず何をするにも、現状をどうにかしなくてはならない。それもできるだけ急いで。

何せこっちは自分がここにぶち込まれた時の時間も分からないまま、ただ明日に処刑すると言われているのだ。悠長に構えている時間は無いと考えていいだろう。何より、こんな理不尽な理由で死んでたまるか。

私は怒りはそのままに、何とか頭を冷静に働かせる。こんな時こそ焦っては負けだ。まずは自分自身のチェックだ。

体には特に怪我や異常は感じない。あるとすれば、ひんやりしたこの空気に体温が少し削られていることくらいだが、活動に支障をきたすには遠く及ばない。よし、逃げるのに問題は無いだろう。本当は殴り込みとかしたい気分ではあるが、私自身は一介の女子高生だ。武術の達人でも何でもない私が特攻したところで、きっと無駄死にに終わるだろう。だからとにかく、今は逃げた方が良い。臥薪

嘗胆とも言つし。

では、早速逃亡計画を練ろう。まずはこの枷だ。魔力を封じるだけ何だかと言っていたが、そんなものに覚えが無いのでそれをどうこうという以前に、手足が拘束されているのは不便だ。逃げるにしても、奴らをフルボッコするにしても、手足が不自由じゃお話にならない。

とは言え、拘束具は全て金属製。枷は鎖と輪っかで出来ているのではなく、四角い板のような形状の物に穴が開いているタイプで、二枚の金属板を鍵か何かで留めているのだろう。鍵、と断言できないのは、枷が黒い上に、暗くて鍵穴が視認できないからだ。ちなみに、猿轡は円柱状の棒を横にして口に無理矢理押し込んでいる奴で、後頭部に回されたベルトのようなものがっさり拘束してある。こっちはまだ外せなくてもいいんだけども。

何とか目を凝らし、手や顔で触って確認してみるが、手枷も足枷も、どういわけか継ぎ目のようなものは見当たらなかった。継ぎ目があればそこに何か捻じ込んで、てこの原理で壊せたかもしれないのに……。黒魔力だのとか言ってたし、何より私をここに召喚したのもあるから、多分この世界には魔法がそれに準じるものがあって、そういうのがかけられているのかもしれない。(持っていないと思うけど)私の魔力とやらを封じる目的があるって言うってたから、何とんでも自力で外せないようにしてあるんだろう。くそ、どうでもいい猿轡の方がまだ外せそうでも意味無いのに。

私は早々に拘束具を壊すのを諦めて、暗闇の中、手探りで牢屋を調べた。先人のプリズンブレイクの努力の跡があれば儲けものだし、何か使えそうなものがあれば隠し持って、処刑の時にそれを使って逃走できるかもしれないからだ。

「(……ん?)」

牢屋の床の上を滑るように探索していた私の手に、ぽこりとイレギュラーな障害物がぶつかった。ぺたぺたとその周囲を確認すると、牢屋の隅の床一帯がでこぼこと盛り上がっていたのである。

この牢には窓が無い。だから多分地下牢なのだと思うが、地面を掘って脱獄されるのを防止するために、床も石造りになっている。石造りなのだから当然石一つ一つに大きさの違いがあってもいいのだが、恐らくは引き剥がされるのを防止するために高さが揃えられていて、まっ平らなのだ。そんな所にイレギュラーなでっぱり……怪しい。怪し過ぎる。

「(せいやつ)」

私は試しに床に敷かれた石を何とか一つ掴み、引っ張ってみた。すると石はほんの少しだけ抵抗して、しかしあっさり地面から引き抜かれる。ちなみに平らな床の石を同じように引っ張ったが、こちららびくともしない。

これは確実に怪しい！私は一心不乱に石を引っぺがした。すると、この牢屋の床、及び壁には、大体1メートルくらいの範囲で穴が開いていることが判明した。まさに先人の努力の跡である。是非先人には素晴らしい脱獄生活を送ってほしいと思った。まさか石を引っぺがして穴まで掘っているとは！

私はさっそくその穴に突入した。一瞬だけ、今まで頭からすっぽ抜けていた見張りの心配をしたが、私を捕まえて牢にぶち込んでくれた連中は、どうやら魔族、つまりこの場合は私を怖がっているようだった。きつと誰も好き好んで見張りなんてしたくないのだろうし、ここが地下牢であるなら、出入り口はあのデブが出て行った扉一つきり、そこだけを見張っていればいいのだろうから、きつとこのまま誰も来ないだろう。杞憂だった。そしてこの連中が馬鹿だというのも分かった。私が言うのもなんだけど、見張りに手を抜くなよ。こりゃあ先人のプリズンブレイクは楽勝だったろうな。

ああそうだ、さっさとおさらばしたいのは山々だけど、後の人のためにここは塞いでいかないといけない。こんなところに入れられるのは悪人だと思うけど、もしかしたら私のように冤罪とか言いがかりとかでぶち込まれる人、居るかもしれないし。それにここから出て行ったことがばれれば、追手がすぐにかかる筈だ。私は退かした石を適当に敷き詰め直してから、できるだけ足早に穴を進んだ。

「（やっぱり、動きづらいな……っ）」

制服が泥まみれになるのも厭わず、私は芋虫のように穴の中を這って進んだ。穴がほぼ垂直になっていたら、手足が不自由な私は文字通り手も足も出なかったが、幸いにしてこの穴は緩やかな傾斜で地上に伸びているらしい。脱出を急いでいるのもあり、本来なら多少なりとも感じていたであろう苦痛や疲労は、全くと言っていいほどに感じなかった。

とにかく一心不乱に穴を進んでいると、やがて地下特有のひんやりとした空気が薄れてきた。出口は近いのだろう。私は空腹の獣が肉にかぶりつくように、新鮮な空気が流れる方へと歩を進めた。

「（あと少し、もうちょっと……！）」

うっすらと穴の終わりが見える。こちらは夏なのだろうか、空気はしっとりとした湿気を含み、熱を帯びている。汗と土による不快感に、熱気が追加されて全身を襲うけど、それに構っているような余裕はない。私はただただ先を目指し、必死に手足を動かし続ける。

あと3歩、2歩、1歩

「……………っ！！」

この穴を隠していたのであろう枯葉の山を押し退けて、生温い空気

が漂う地上に飛び出す。猿轡のせいで存分にはいれないが、できる限り深く呼吸を繰り返しながら、私はその場に倒れ込んだ。

「（出られ、た……！）」

私は肩で息をしながら、ごろりとその場で仰向けになった。剥き出しの地面だが、既に土だらけなのだ。気にすることは無い。というか、気にしてもらえない。足早な躍動が止まない心臓を宥めつつ、私は周囲を見回した。

まず、正確な時刻は不明だが、周囲は暗い。夜だ。真上に広がる夜空の星は、プラネタリウムばりに散りばめられている。綺麗だ。あと月が7つある。驚きだ。

横目に確認すると、どうやらここは森の中か何かのようだ。周囲には木々が生い茂り、その奥に僅かに石の壁と、城らしき尖塔が見え隠れしている。あそこは城の地下牢だったのか。そういえば王の命とか言ってたな、あのデブ。成程。

「（……あんまり長居すると、まずいよな）」

息が整ってきたところで、私は上体を起こす。いくら慣れないことをした後で疲れているとは言え、このままここに居ても何も良いことは無いだろう。何せここは城の目と鼻の先で、こちらは脱獄囚。搜索が始まったら速攻捕縛されるのは目に見えている。

それに、この森に他に生き物が居るのか今は分からないが、肉食獣が居たらそれでもアウトだ。いや、ファンタジー的に考えて、モンスターを警戒した方が良いのか？とにかく、喰い殺されるのは御免だ。自分じゃなきゃ別にいいけどさ。

まあどの道、手枷足枷猿轡付きの私が無力なことは変わらないわけだけど、だからこそそれらに立ち向かうことよりも、それから逃げることを考えないといけない。少なくとも今は。

「（とはいえ、これじゃろくに動けないな……くそ）」

私は忌々しい拘束具を睨み、舌打ちする。地上に出たことでその姿をはつきりと確認するが、やはり思っていた通りの構造だ。黒々とした重厚な柵には、捕らえたものを決して逃がさないという不可視の意思すら宿っているように見える。しかも怒りと興奮が脱出の成功で一度冷めたため、その重さが今更ながらに押し掛かってきた。よくこんな物をぶらさげてここまで逃げられたものだ。

つい自分の火事場の馬鹿力に感心するが、そんなことをしている場合ではない。逃げなくては。柵で思うように動けなくても、とにかく少しでも遠くに逃げて、何としても身の安全を確保しなければならぬのだ。

何せここは私の世界ではない。先程まで晒されていた処刑の危機のように、何が起きるか分かったものではないのである。だから逃げて、息を潜めて耐え忍び、いつか私を理不尽に殺そうとした奴らをぶち殺すための力を、知恵を付けなくては。そのためにはまず、安全を第一に確保しなくてはお話にならない。全ては安全を確保してからだ。

「（そうだ、絶対にあいつらを殺すんだ）」

本当なら今頃、自宅で夕飯を食べて風呂にでも入っていただろう。

まさか自分の読んでいるラノベでもあるまいし、こんな脱獄劇も命の危機も訪れていた筈が無いのだ。しかも自分たちが呼び出しておいて、理不尽な理由で殺すなんて最悪だ。勇者とかそういうポジシヨンなら、まだそれなりの待遇をされて今よりましな考えや感情を持っていたかもしれないが、もう駄目だ。何が公開処刑だ、無実の罪で民の娯楽につき合わされるなんて冗談じゃない。

私は再び怒りが頭を沸かし始めたのを感じながら、不恰好に立ち上

がって歩を進めた。走れなくても歩けるなら、それで行くしかない。歩けなくなったら這って行けばいい。

ただ、立ち止まってはいけない。

だが、そうやって自分を奮い立たせ、怒りを動力源に森を進んでいった私の耳に、不意にがさがたと木の葉が擦れる音が届いた。

「（誰か、いや、何かいる！？）」

まさかもう追手が？いや、危惧していたモンスターとかの肉食獣か？一気に体温が下がった私が、その音がした方向に反射的に顔を向けるよ、

「…………お姉ちゃん、誰？」

小さな少女が、こちらを窺っていた。

私は目を瞬いて、目の前の少女を見つめた。

髪は黒。紺色に近いのか、月明かりの下、その長い髪は黒と紺の二色が入り混じった、落ち着いた美しい色合いを醸し出している。年齢は7に届くかどうかといったところか。私の腰くらいまでの身長の少女は、私と同様にぱちぱちと大きな瞳を瞬かせて、こちらをじつと窺っている。その愛らしさは目を引くが、それ以上に私の意識を奪ったのは、少女の容姿だ。

少女の肌の色は、青だった。

病的な色合いの比喻ではなく、本当に青い。更に、大きな瞳の色は金色だが、白目に当たる部分が黒い。そして極めつけは、ローブのような服を破り、その背中に生えた蝙蝠のような翼だ。

「（この子、人間じゃない……！？）」

私は突然の出来事に、思わずその場に立ち尽くした。

もしかして、これが魔族だろうか。いや、きっと間違いない。これを魔族と言わずして何と言う。

どうしよう、どうすればいい？こんなのはさすがに予想外だ。相手は少女だが、人間でないならきつと見た目以上の何かを持っているのだろう。それに少女の考えが現時点では全くの不明だ。敵意の有無も分からない人外を相手に、一介の女子高生、しかも身動きが自由にできない身で、この場を一体どうやって切り抜ければいいのだ。

「お姉ちゃん、泥だらけ……どうしたの？」

「！」

はっとして目線を落とすと、少女はいつの間にか私のすぐ目の前まで来ていた。私が呆然としている間に距離を詰めていたらしい。驚いた私が思わずバランスを崩して大袈裟に尻餅をつくとき、少女は「お姉ちゃん大丈夫……？」と言い、ぺたぺたと私の体を触り始めた。反射的に身を強張らせるが、少女は意に介することなく、私をぺたぺたと触り続ける。その様子には全く邪気が無く、眉を八の字にしているところを見ると、むしろ心配すらされているようだった。

……警戒する必要、無さそう。

私は何となく気が抜けたのを感じながら、少女の頭をそつと撫でた。汚れた手で触るのは気が引けるが、猿轡のせいで口を利くことができないので、せめてこうしてやることしか、心配を取り除く方法が分からなかったのだ。

少女は私が頭を撫でたことに驚いたのか、一瞬目を大きく見開いたが、すぐにふにやりとした笑顔を浮かべた。やだ何この可愛い生き物。種族が違うとか関係無しに可愛い。元々人外キャラ好きだったのもあるかもしれないけど、本当に可愛いなこの子。枷で存分に撫でてあげられないのが悔やまれる。

「ねえお姉ちゃん……どうしたの？何で、こんなところに居るの？」

暫く少女の頭を撫でていると、少女が改めて質問した。だが、残念ながら私は喋ることができないため、やはりこの質問に答えることはできない。私は猿轡を指差し、首を横に振った。

「喋れないの……？」

「（こくり）」

少女は思いもしなかったというような顔をして尋ねる。まさかとは思うが、これ趣味か何かだと、好き好んで付けてると思われるの

だろうか。シヨックだ。いたいけな少女に変態だと思われたのか私は。予想外のダメージは大きかったが、とにかく頷き、更にこれを引張って、外して欲しいという意思を必死で伝えてみることにする。私は身振り手振りで、少女に猿轡が自力で外れないことを示す。ベルトのような部分に手をかけて外そうとすると、枷が思いの外邪魔で無理なことを、実際にやってみせたのだ。

「これ、外したいの？」

「（こくり）」

どうやらこちらの意図は通じたらしい。ついでに変態的な印象も壊れてくれれば良いと思いつつ、再び私が頷くと、少女は必死に猿轡の拘束を解こうと奮闘し始めた。ちよつと髪の毛が引つ張られて痛かったけど、少女の努力と私の我慢も空しく、拘束は少女では全く歯が立たなかった。チクシヨウメ！某独裁者が脳裏で悪態をついた。

「お姉ちゃん、ごめんね……」

「（ふるふる）」

少女は困ったような、申し訳ないような顔をして、私にごめんねと謝ってくれた。謝ることなんてない、少女は十分に頑張ってくれた。謝るのはあのデブ共である。絶対殺す。意地でも殺す。私は殺意をより一層固くした。

それはそうと、一番拘束を解くのが容易そうに思えた猿轡さえ少女の手には余った。きつと手足の枷を外すのも無理だろう。猿轡で無理だったが、私は雰囲氣的に溜息を吐いた。

「……………」

「……………」

「……………あつ、そつだ」
「？」

私の意気消沈具合に、共に肩を落としていた少女だが、不意に何かを思いついたように声を上げた。

「あのねお姉ちゃん。今からマリアのお兄ちゃん、呼んでくるね。マリアじゃこれ、外せなかつたけど……………お兄ちゃんは大人だから、きつと大丈夫つ。待っててね……………！」

「（あつ）」

いや、待っててと言われても、私あんまり時間無いんだけど。逃げなきゃいけないんだけど。

しかしそれを伝える間もなく、少女（マリアというのだろう。……………魔族で聖母の名前……………）はそう言つと、ぱたぱたと茂みの奥に消えてしまった。子供と言えど、走っている相手に今の私が追い付ける筈も無い。

さてどうする。少女、もといマリアには悪いが、もう行くべきだろうか。悠長にしている暇は無いのだ。逃げるのなら夜の方が何かと都合が良いが、夏の夜は短い。7つの月は真上に無く、傾いてきていることから、夜がそう長くはないことは明白だ。

しかし、マリアは兄を連れてくると言った。マリアの兄がどういう人物かは分からないが、この忌々しい拘束具を外してくれるかもしれないというのは魅力だ。逃亡時間を削るだけの価値はあるだろう。

「（……………待てよ……………）」

そもそも、マリアの行動自体が毘だったとしたら？マリアとその兄が共謀し、私を油断させてから殺そうと企んでいたらどうなる？

私は人間だ。あのデブ共の魔族に対する反応、更に、魔族と勘違いした私への仕打ちを考えれば、人間は魔族を忌み嫌い、恐怖しているのが分かる。なら、魔族が人間に対して同じような感情を持っていないと言い切れない。大人しく待つていた結果、殺されてしまう……そんな結末はバッドエンド過ぎる。

「（……いや、早まるな。考える）」

マリアは少女だ。つまりは幼い故に、人間への敵意などは無いとも考えられる。それが演技かどうか見抜く術は私には無いが、もし本心から心配していたとしたら？今の私は相当酷いことを考えている。もし兄を連れて来た時に私が消えていたら、あの少女は傷付くかもしれない。私がマリアを信用していないことを、言外に示すからだ。私は基本的に他人のことなんて考えないし、他人の気持ちなんて察することはできない自己中野郎だが、少なくとも好意を持っている相手のことは必死に考える。私はマリアのことを少なからず好きだと思った。だから傷付くかもしれないなんて考えている。

「（なら……それでいいんじゃないだろうか）」

マリアを悲しませたくないなら、ここに居ればいい。そうだ、こんなに簡単なことじゃないか。何を躊躇う必要がある。もしマリアかその兄、あるいは両方に殺されたら、あのデブ共と一緒に呪い殺してやればいいだけの話だ。私はそう結論付けると、近くの木に背中を預けてマリアを待った。

「お姉ちゃん……!」

「（マリア）」

再び木の葉が擦れる音が聞こえ、茂みからマリアがやって来た。マリアは私が大人しくここに居たことに安堵したのか、少しだけ不安そうだった表情を、ほっとしたものに変えた。

うん、やっぱり可愛い。マリアはきつと、本当に親切心で動いてくれていると思う。待っていて良かった。私は傍に座り込んだマリアの頭を撫でてやった。

……あれ？よく見ればマリアは一人だ。連れて来るって言ってたお兄さんは？

「あのね……お兄ちゃん、もうすぐ来るよ」

茂みを見つめる私の意図が分かったのか、マリアは私を安心させるように笑顔でそう言った。そしてそれを証明するように、もう一度茂みが揺れる。

「マリア、一人で先に行かない」

「お兄ちゃん」

「（この人が……）」

現れたのは私より年上に見える、背の高い男性だった。やはりマリアと同じく肌は青く、右目を覆うような髪は黒。瞳は黒に金で、ローブの背中から生える翼は、マリアよりも大きかった。大体の特徴はマリアと合致するが、彼のこめかみの辺りには、羊のような黒い立派な角が生えていた。

どうやら、男性はマリアに置いて行かれたらしく、そのことをやりわりと嗜める。容姿を窺うが、顔は良いけど、私は何となく陰気臭いというか、陰湿そうな印象を受けた。マリアと似た顔立ちなのに、全然印象が違う。

「お姉ちゃん。この人がね、マリアのお兄ちゃん……ヨシユアお兄ちゃん」

「（今度は神の子の名前か……）」

兄妹揃って、種族に似合わない名前だなと思う。まあとりあえずマリアに紹介されたのもあるし、ただ見ているだけというのも何なので、私はヨシユアさんに軽く会釈をする。日本人としては立礼したが、立つのが少し大変なので、ここは大目に見て欲しい所だ。

「初めまして……て……」

「（こくり）」

「……」

「……」

ヨシユアさんは私を見ると、何故かそのまま動かなくなった。やっぱり人間を警戒しているのか？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……お兄ちゃん？」

……あまりに沈黙が続き過ぎる。いや、私も無言だけど、猿轡してらんだからこれは仕方ない。マリアも不思議に思ったのか声をかけるが、それすら無視。

まさかこれがデフォルト？いや、さつき普通に喋ってたから多分それは無い。それに警戒とかしてるにせよ、何で棒立ちのままノーリアクション？私何かしたか？いや、むしろこの人に何かあった？そう思った私は、よくよくヨシユアさんの顔を観察してみた。……

あれ？何か顔赤くね？暑いからとか、そういうのじゃない脂汗かいてない？

いや待てよ……まさか……

「……………っ！！」

「お兄ちゃんっ？」

「（ああ……………やっぱり、そういうフラグか……………）」

ヨシユアさんは私が凝視しているのに気付くと、はっとしたように近くの木の後ろに隠れた。そしてちらちらとこちらの様子を窺っている。うぜえ。

だが間違いない……………これはフラグだ。フラグが立ったよハジ……………！

「お兄ちゃん、どうしたの？お姉ちゃんのおれ、外してあげてよ…

……………」

「マ、マリア、私は、その……………っ」

「（どもってます私と目を合わせません顔が赤い挙動不審ハイコレ決定！何でここでテンプレ設定が復活した？馬鹿なの？死ぬの？）」

残念ながら、異世界召喚勇者物語的なテンプレの一つ、勇者のハーレム、あるいは逆ハーレムのテンプレが、今ここで復活したようです。全力で要らねえ。

ここで私がテンプレ的な主人公だとすると、相手が自分に好意を持っていることに気づかないというのが鉄板だ。しかし、私は違う。勇者どころか魔族呼びわりされている、テンプレ枠から外れた主人公である。ラノベ・乙女ゲー愛用者なめんなよ。天然女扱いも、自惚れ逆ハー狙い扱いもすんな。

「（今フラグが立ったところで、ウザイし面倒なだけなんだよな）」

ヨシユアさんと私の間に立ったフラグは、恋愛フラグと見て間違いない。女が苦手なのかもしれないが、どの道私に惚れるのとどっちが先かというだけの話だ。

これだけ聞くと私が凄いナルシストに思うだろうが、こんなまさにテンプレ通りの反応されて気づかないなら、そいつは馬鹿だ。「えっ？まさかね……」で済むようなものではない。読者やユーザーとしては毎回思うんだよね、「気付け馬鹿」って。まあ好きだから読むし、プレイするんだけど。

そんなわけで、読者・ユーザーの観点をしっかり持つ私としては、ガチ主人公になったとしても、フラグを見抜くのは容易いということだ。他意は無い。

しかし、問題はここからである。見たところ、ヨシユアさんは純情こじらせて不審者になるタイプだ。下手したら絶対ストーカーに走るよこの人。雰囲気既に暗いし、陰気だしね。

で、そんなタイプは往々にして、女性とコミュニケーションを取れない場合が圧倒的に多い。妹のマリアはきっと平気なのだろうが、フラグ立ってる私なんて、絶対に無理だろう。ていうか、この距離感が既に無理なことを証明している。そんな人が私に接近して、更に接触し、拘束を解くなんて、できる筈が無い。絶対無理だ。

「（しょうがない……マリアには悪いけど、放置して行くか）」

兄を木の陰から引つ張り出そうとしているマリアに申し訳なく思いながら、私はのそりと立ち上がる。あ、やばい。月大分傾いてきてる。急がないと本格的にまずい。早く遠くに行かないと……。

「お姉ちゃん……！」

「あっ……！」

「（ごめんねマリア、親切にしてくれたのに無駄なテンプレが発動

しちゃったせいで困らせて……あとヨシユアさんはウザイので早く目を覚まして下さい。このフラグは面倒なんで」

私の様子に気づいた二人が、同時にこちらを見つめる。伝わるかは分からないが別れの言葉を胸中で口にして、私はその場を後に

「ま……待って下さい!!」

「!?!」

私は突如ヨシユアさんに肩を引つ掴まれ、大きく上体が傾いだ。この野郎何で急にアグレッシブになった!?!つか私の足元見てなかったのか!足枷付いてて走り去ったり普通に歩いて行ったりできるわけないだろ!何でこんな全力で引き留めたテメエエエ!!

足枷のせいで思うように踏ん張れない私は、ろくに抵抗もできずに反転し、ヨシユアさんに向かって倒れた。当のヨシユアさんとは言え、私がこんなにあっさり倒れるとは思わなかったのだろう。かなりの間抜け面で、更に咄嗟の対応も取れず、私の下敷きになって一緒地面に倒れた。

「……っ!」

「っ痛……」

「お兄ちゃん、お姉ちゃん!」

マリアが私達を心配して駆け寄ってきた。後頭部をぶつけたらしく、悶絶しているヨシユアさんの上から離れるべく、私はその場でもぞりど起き上がる。

……ん?何か尻の辺りに違和感が……。

「……………」

ここまで無駄にテンプレか、ラッキースケベめ。私は最早突っ込む
気力も失せていた。

「けほっ、げほっ……」

溜まり切った唾液に数回咽ると、私はヨシユアさんから忌々しい猿轡をひったくり、森の奥に投げ捨てた。あんな物二度と見たくない。付けるのなんてもっと御免だ。ケツ、と放り投げた方角に悪態をつき、口元を乱暴に拭う。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよマリア。心配してくれてありがとうね」

そう言つてマリアの頭を撫でてやると、マリアは可愛らしい笑顔を浮かべてくれた。まさに聖母^{マリア}、いや天使。本当に可愛いなこの子は。連れて帰りたい。だがそれに比べて……

「……………」

ラッキースケベ、違った、ユシユアさんは何ていうか、うん。残念過ぎる。何で猿轡を投げた方向を名残惜しそうに見てるんだ。まさか欲しかったのか？ちよつとキモいぞ。駄目だよこの人、出会つて数分で変態という名の紳士にクラスチェンジしてる。

そもそもこの猿轡を外してもらつても、ちよつと気持ち悪かった。ラッキースケベに気付いているのかどうかは知らないが、私が押し掛かったつてというのが相当キたらしく、元は青かった筈の肌が見事に真っ赤だった。後頭部をぶつけた痛みを通り越して妙に興奮して、息遣いも変態臭かった。だがここまではまだいい。まだマシ

だった。

問題はここからだ。マリアが拘束具を外して欲しいと何度も言ったのに、彼は自分から私に近づけなかった。予想していたことだし、仕方が無いので諦めて立ち去ろうとするのだが、ヨシユアさんはその度に引き留めるのだ。しかもその時だけ自分から近づくのだから、余計に腹が立つ。最終的に何とか私が木の方に追い詰め、無理矢理迫って取らせたのだが、息遣いが更に荒くなった。めっちゃ匂い嗅がれてた気がする。ちよつとぞつとした。記憶が劣化するの、あんまり待ちたくないんだけど。

「ねえお姉ちゃん、お姉ちゃんの名前は？」

ヨシユアさんを残念な目で見ていると、マリアが可愛らしく上目遣いで質問してきた。だから何なのこの可愛い生き物は！今だけ私はヨシユアさんのことを変態呼ばわりできない……！

「う、うん、そういえば自己紹介できなかったもんね。私は依よる。芹沢依だよ」

「ヨル？」

「そう、依　ヨルだよ」

「……ヨルお姉ちゃん！」

私の名前を知ったのが嬉しいのか、マリアはまた良い笑顔を向けてくれた。ああああ可愛い！可愛いよマリア超可愛い！私今ならロリコンって言われてもいい！この手枷さえなければ、もう滅茶苦茶に抱きしめたい！

「……………ヨル、さん……………」

だが、私の幸せな気分を木端微塵にするように、背後から不吉な声

が聞こえた。ぽそりと私の名前を呼ぶヨシユアさんは、天使のような妹と違って、顔を赤らめながらも影のある不気味な笑顔を浮かべていた。こう、ニタア……って感じの。顔が良くなかったらただの不審者だが、顔が良いので、まだ「陰のある青年」みたいな感じでギリギリで許されるレベルだ。イケメンという名の変態の癖に。だが……まあこれでもマリア同様、彼は私の恩人に当たるのだ。喋れるようになったのだし、きちんと礼を言うべきか。私はヨシユアさんに向き直った。

「その、ありがとうございます、ヨシユアさん」

「……！！！！……わっ、私の、名前……っ！！」

「はい」

「……も、もう1回……いい、ですか？」

「……ヨシユアさん」

「~~~~~っ！！！！！！！！」

ああもう駄目だこの人、救いようが無い。名前呼ばれただけで身悶えてるよ。

マリアはこの兄の様子を初めて目にするのか、さつきから私とヨシユアさんが何かアクションを起こす度、オロオロと兄と私を交互に見やっけて困っている。うん。初めてあの人が喋ってた感じを思うに、マリアには本当に普通に接してみたいたからな……そりゃ戸惑うわ。

それにしても、もう随分時間が経った。月はもう3つ森の木々に隠れているところから、残された時間はあまり多くないだろうし、私もいい加減精神的にも肉体的にも疲れているのだ。早く逃げて、安全な隠れ場所を確保し、休みたい。

……よし。さつきと終わらせよう。私は少し意を決すると、木の幹をばんばん叩いてるヨシユアさんに声をかけた。

「あの、お忙しいとこ申し訳ないんですけど、こつちも外してもらえませんか？」

「……………あつ……………その枷、ですか……………」

ヨシユアさんは私が発する言葉を一言も聞き漏らしたくないのか、即座に奇行を止めて私に向き直る。だがここで気になったのは、彼が枷を外すことに、さっきの猿轡の時と違って赤面するのではなく、困った顔をしたことだった。

「そ、その枷……………見たところ、強力な呪具です。枷を嵌めている者自身の魔力を利用して術式が展開され、対象の魔力を封印、及び枷自体の物理的強度と、術式保護のための魔術的強度を、魔力の許す限り上げています。これを外すには専用の解言を告げるか、無理矢理枷を破壊するか……………あるいは、膨大な魔力で無理矢理術式を壊すしかありません」

「それ、ヨシユアさんできますか？」

「その……………ヨ、ヨルさん……………のお力になりたいのは山々ですが、私の方では、ど、どれも……………。ヨルさん、かなりの魔力をお持ちのようなので、封印がとんでもないレベルになって……………それに、物理的に壊すのも、む、無理です」

「そう……………ですか」

相変わらず目は合わせず、人差し指同士を突き合わせてもじもじとした軟弱な気持ち悪い仕草をしているが、会話の内容が真面目なためか、ヨシユアさんはかなりまともに喋る。「ヨルさん」と言った時だけ一気に変態臭い声音だったが、それを帳消しにできるくらい普通だった。

だが、状況は全く進展しなかった。私はこの枷をこれからも付け続けなくてはならないことが決定したのだから、当然である。むしろ悪くなったと言っていい。枷が外れる方に賭けていたからこそ、私

は時間の浪費を良しとしていたのだ。それが失敗に終わった今、私は会話が可能になったこと以外に何のメリットも得られず、ただ徒に時間を消費してしまっただけなのだから。

「（くそ、やつかいな物付けてくれやがって……あのデブ共ますます許せなくなつたな）」

私はギリ、と齒を食いしぼり、城を睨みつける。あの豚共め、やつてくれやがる。生きたまま燻製にして家畜の餌にしてやろうか。そんな拷問計画を立てつつ、私は今後のことを考える。正直これが外せなかったのは痛手だが、それにこだわり過ぎても時間がもったいないだけだ。こういう時はすぐに次の行動に移らないと、二の足を踏んでいる内に失敗するのがセオリーである。

逃走に最も必要な時間はもう少ない。では、その残り少ない時間をどう有効活用するかがこれからの課題だ。そのために今必要なのは……

「……ねえマリア、この辺りってどういう場所？教えてくれない？」

私はマリアに、この辺りの地理を訪ねた。地理のことが分かれば、ただがむしゃらに逃げるよりは、ある程度賢く逃げ回れるだろう。時間が無いのなら地理を把握し、それを上手く活かすしかない。土地勘の無さを少しでもカバーすれば、少しは逃走の助けになる筈だ。

「うん。えっとね……ここは人間界の、エウラタって国だよ。あの壁の向こうがエウラタのお城と町で、ここは町の外の、ヘジュデの森なの」

「あの城下町以外で、近くに街とか村とか、人が居るところは？」

「森をあつちに抜けた川の向こうに、ラーシャ村があるよ」

「ここから川までは近い？」

「うーん……ちょっとだけ遠い」

マリアの教えてくれた情報を元に、私は頭の中で地図を作る。月が地球と同じように西に沈むと仮定して、城はここから南。川はここから北東。更に川からそう離れていない場所に村……と。

さて、私が城の者なら、脱獄犯をどう追うだろうか。逃走経路が不明だと仮定したら、まず城下町を搜索するだろう。特に裏町やスラムといったものは、人の出入りが多い城下町のような場所なら必ずあるだろうし、そういう場所は訳有りの人間が隠れるのにつつつけの場所だからだ。それと、町の外の搜索は整備された道ではなく、この森を対象にする。森の中なら隠れる場所はそれなりだし、自生している茸や木の実、木の根などを食べることもできる。飢えの心配が無くなるからな。そして次に搜索するのは、村の方だ。木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中である。城下町と同様、人に紛れる可能性がある。

「（つまり、人里は追手がかかるからアウト……）」

選択肢から城下町と村の存在を消し、森に潜伏するのも危険とする。残されたのは川だけだが……そうだ、いつそ川を下るといっのはどうだろうか。川に入れば匂いが消え、犬を使った搜索をされた場合、そこで撒くことができる。幸い今は夏だ、水温も高くないから、凍死の心配も無い。ただこの枷があるから、あんまり水深が深かったり流れが速かったりすると、溺れる可能性がある。

だが、川はいずれ海に出るだろう。海には港があると考えられるし、流れ着いた先に無かったとしても、海岸線に沿って行けば辿り着くかもしれない。そこで船の一つにでも潜り込めば、追手も来ない筈だ。それに上手く流れに乗ることさえできれば、体力を無駄に消費することなく、水が運んでくれる。危険だが、やってみてもいいだろう。それにこの土まみれの格好も、いい加減に何とかしたい。

「マリア、ありがとうね。ヨシユアさんも。私そろそろ行きます」
「あ、あの、ヨルさん、さっきから、どこに行くおつもりで……？」
「あの城の連中から逃げんの。どこでもいいから逃げないと殺される」

「こ、殺されるっ？ヨルさんが？」

「ヨルお姉ちゃん、何で殺されるの……？」

「何だか知らないけど、私、魔族だとか言いがかり付けられてんの。私は人間以外のものになった覚えなんざないってのに……！」

「……え？」

私の言葉に、ヨシユアさんは勿論、マリアも、ぽかんとした顔をした。あれ？私何か変なこと言った？

「ヨルお姉ちゃん……人間なの？」

「うん」

「で、でもヨルさん、ま、魔力だって、黒いですし……魔族では？」

「は？いやいや、そんな馬鹿な」

突然何を言い出すんだ変態という名の紳士。私の親は普通に人間で、肌は青くなかったし、目も普通で、魔法なんて使えないし、翼も角も無かった、関東在住の日本人のだが。祖父祖母も同じく。そんな人間しか生まれようのない環境で生まれ育った私に向かって、何を馬鹿なことを。100歩譲って勇者だとしても、魔族なんて人外な存在ではない。

「黒魔力は、ま、魔物、及び魔族……魔界の民、特有の魔力の色です。だから貴女は、ヨ、ヨルさんは、魔族で間違いないかと……」

「お姉ちゃん、人間の姿だけど、魔族でしょ……？」

「……えーと」

嘘だろ。.....。

「（嘘だ、だって私人間だよ？それとも、私の世界の人間がこつちで言う魔族なわけ？いや、それはない、だって私とマリア達じゃ全然見た目が違う。それに人間の姿だって……でも私、人間で、魔族じゃなくて、）」

「ヨ、ヨルさん……」

「ヨルお姉ちゃん……？」

私はその場にへたりこみ、ごちゃ混ぜになる頭を抱えた。

勿論、私は人間だ。生粋の日本人で、確実に人間種だ。間違いない。だがこの二人、そしてあの城の連中は、私を魔族だと言う。人間であるデブ共から言われれば、それは言いがかりだとはつきり否定できる。だが、魔族であるこの兄妹までもが私を魔族だと言うと、途端にはつきりと言えなくなる。私は人間であることを否定され、更に人間ではないと肯定されてしまったのだ。

否定と肯定は、どちらか片方だけだと、使われなかったもう片方で反論ができる。だが、両方の言葉を使って同じ根拠で突きつけられると、それらは互いを「確認」という形で補い合い、逃げ道が無くなってしまうのだ。

そして今私は、その否定と肯定の袋小路に追い詰められている。

「いや、私、人間だし……魔族じゃないし……」

「いえ、ヨ、ヨルさんは、間違いなく、私達の同胞です。でなきやマリアがわざわざ私を呼んで、あ、貴女を助ける筈が無いですし……」

「……」
「うん……マリア、ヨルお姉ちゃんが人間なら、殺してたよ？」

何てことだ。いつの間にか、私は命がけで自分が人外であると証明

していたというのか。ちょっといたいけな笑顔にぞつとした瞬間だった。ていうか、やっぱり人間と魔族ってそういう仲なんだな……あ、いや待って待って、話がずれてるな。

とにかく、私は人間であり、魔族ではない筈……いや、ないのだ。私は人間だ。いくら人外キャラが好きだったとはいえ、自分がいきなり「実は人間じゃありません」なんて言われて、納得なんのできるか。大体見た目に変化があるとか、そういう諦めるしかない要素が提示されたわけでもないのだから。きつとラノベ展開的に考えて、突然変異とか、勇者の恩恵として召喚された時に、その魔族かどうかを見分ける基準っぽい「黒魔力」とやらが宿ったとか、そういうことに違いない。

「（よ、よし。そう思ったら落ち着いてきたな……）」

「大丈夫？お姉ちゃん……」

「あ……うん……」

私はマリアにちょっと引き攣った笑みで答えながら、とりあえず私は人間だということ、問題を棚上げした。もういいじゃん、こんな考えたくない。

それに時間が……そう、時間が無いんだった。やばい忘れてた。早くしないと。

「と……とにかく、私もう行くから。色々ありがとう」

「あつ……ま、待って、ヨルさん!!」

「（だから何だっただよアンタは!!）」

私が立ち去ろうとすると、案の定ヨシユアさんが引き留めてきた。ラッキースケベ事件、もとい私の押し掛かりを経験したせい、2回目以降は思い切り肩を掴んだりすることは無く、軽く制服の裾を掴んで呼び止めるだけなのだが、それをシカトすると、服を掴んだ

ままずつと後を付けてくる（ちなみに、マリアも普通について来てしまう。あれ？もしかしてこの兄妹こういうとこ似てる？）。なので無視できず、ずるずると引き留められ続けるのだが、本当に何なんだこいつは。何がしくて呼び止めるんだ。

……あ、そうだ、フラグ立ってんだった。好きな人と一緒に居たくて呼び止めちゃうんですね分かります。ただここまできると迷惑だけだな！

「……何ですかヨシユアさん。私急いでるんですけど」

「そ、その……えっと……」

「……………」

「あつ……………だから、その……………」

これが乙女ゲーなら、主人公は辛抱強くこの変態野郎の言葉を待つのが正しい選択肢なのだが、生憎私は本当に時間が無いし、このフラグがへし折れたところで痛くも痒くもない。ていうかむしろバキバキに折らせて下さい。できれば本人の骨ごと。

……とか考えていたせいか、ヨシユアさんが少しびくついた。どうやら顔に出ていたらしい。彼は私の雰囲気を感じたのか、ようやくおずおずと口を開いた。

「いいい、行く当てがないなら……………う、うちに来ませんかっ！」

「……………ヨシユアさんの家？」

私に、ストーリーカーの家に行けと？それどう考えてもろくでもない展開しか考えつかないぞ？……………いや、こいつ私に自分から近づけないから、突然襲われるような悪夢のような展開は無いか。あるとしたら嫉妬に狂って、とかっていうヤンデレ発動パターンだけど、ヤンデレが発動するようなフラグは無いしな。

……………でも何か嫌なんだよなあ。正直、行ったらまた妙なフラグが立

ちそうな気が

「お姉ちゃん、マリア達のおうち、来て……？」

「お邪魔します」

即答。

だって上目遣いに小首を傾げるとか、それ反則だから。マリアマジ天使。いや魔族。でも天使。美少女万歳。もう私は堂々とロリコン宣言する。

そつだよ、冷静に考えれば、ヨシユアさん一人暮らしじゃないよ。マリアが居るんだ。二人きりなんていう、変態を興奮させるだけの要素は無い。それに利用するようで申し訳ないが、これって要は彼らの家に匿ってもらえるということだ。これはヨシユアさんの好感度が上がるというデメリットを、かなり上回るメリットである。

「ヨ、ヨルさん……！！！」

「本当？ヨルお姉ちゃん、来てくれる？」

「うん。行かせて？」

「やったあ！お姉ちゃん、マリア達のおうち、こつち！」

笑顔のマリアに手を引かれた私は、喜びのあまりくねくねと体を動かすヨシユアさん……違った、変態を視界から外しながら、ゆっくりと森を進んだ。拘束されたままだしね。

そうして10分ほど茂みや木々の間を進んで行くと、やがてひっそりと木々の間に隠れるように口を開けた、不吉な感じのする洞窟が姿を現す。マリアによると、この洞窟と魔界が繋がっており、マリアはここから人間界に遊びに来るらしい。私を見つけたのも、こっそり遊びに来たからだそうだ。

ちなみに何をして遊ぶつもりだったのかを訊くと、「えっとね、暇潰しに、町の人を殺すつもりだったの」と、はにかんだ笑顔で答え

た。マリアは可愛いから、何をしても許されると思うんだ、私。

「何か霧が出てるけど、これ何？」

「これ、瘴気だよ。黒魔力で出来てるの。あのね、ここは魔物か魔族……魔界の人じゃないと、通れないの。それ以外が通るとね……瘴気で死んじゃうんだよ」

マリアが洞窟に充満する紫色の霧を指し、説明してくれる。確かに、瘴気としか言いようのない雰囲気だ。大体RPGでは魔界とかそういうところに発生しているとされる瘴気だが、この世界でもそうらしい。

……ていうか、魔族か魔物じゃないと死ぬって、それ……

「私、死ぬんじゃない？」

「なな、何故、ですか？……ヨルさんは、魔族ですよ？瘴気は、同じ黒魔力を持たない者を、き、拒絶するんです。で、ですが、黒魔力を持つ者にとっては、た、ただの霧……むむ、むしろ、魔力を回復できるものなんです」

奇妙な動きをようやく止めたらしいヨシアさんが、マリアを挟んで私に不気味に囁いた。子供一人分の距離があるのに、どうしてこんなぼそぼそとした声がこんなにはつきりと聞こえるのだろうか。少し呪いじみている。

しかし、黒魔力とやらさえ持っていれば、瘴気は人間の私でも平気ということか。良かった。ヨシアさんには全く安堵できる気がしないが、彼の言葉には安堵する。それに、この瘴気がある限り、追手は絶対にかからないことも分かった。もう追手のことは忘れていいだろう。

「あっ………出口だよ、ヨルお姉ちゃん」

「マリア、走るのは止めなさい。ヨルさんが大変だろう」

妹に対しては普通に喋るヨシユアさんの注意を受けながらも、早く私を魔界に連れて行きたいらしく、どうしても小走りになるマリアに必死について行くと、行く手がほんの少し明るくなった。マリアの言う通りあそこは出口で、ここから先は魔界とやらになるのだろう。

「……………うわあ……………」

私の目の前の魔界の景色に、思わず顔が引き攣るのを感じた。やっぱり魔界は魔界と言うだけあって、ヨシユアさんのように陰気臭い雰囲気だったのである。

空は墨をぶちまけたように黒い。だがこれは多分夜だからで、光はやや暗いものの、やはり月が7つあった。星の無い空には代わりのように暗雲が立ち込めて、たまに雷が鳴ってる。そんな空をコウモリっぽいものとか、ドラゴンのようなものが飛び交い、ついでにモンスター的なものも飛んでいる。

地面は基本的に荒野……………いや、焦土？ここは不毛の土地だと声を大にして宣伝しているような大地だ。そして、大地に申し訳程度に生えている植物は、彩りなんて元々無かったというように、見事に黒と白の二色きり。初期のテレビか。木は全部枯れ木で、葉が茂っているものは一つとして無く、どうやって種子を作っているのかがかなり疑問だったが、遠くに森らしきものが見えるので、多分本当は葉っぱがあったのだろう。

そして、極めつけは瘴気だ。この瘴気はどうやら地面のひび割れから噴き出しているらしい。そのひび割れはあちこちにあり、小さな間欠泉の如く勢い良く噴き出しているのだ。こんなに瘴気が噴出していけば、陰気臭い雰囲気も5割増しになるうというものだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

魔界にドン引きした私に、マリアがきょとした顔で尋ねる。そうか、人間なら引くか嫌がるかの二択であるう魔界も、この子にとっては生まれ育った自分の世界だから、引くも何も無いのか。ヨシユアさんも同様にきょとした顔をしている。

「あ、いや……何でもない」

「そう？……おうち、こつちだよ」

何か一々気にしたら負けな気がしてきた私が取り繕ってそう答えるのと、マリアはまた私の手を引いて歩き出した。たまに良く知る二足歩行の生物っぽい骨が転がっているのを見かけたが、私は何も見なかったことにするのを忘れなかった。

「着いたよお姉ちゃん。ここがマリア達のおうちだよ」

……言つては何だが、マリアとヨシユアさんの服が質素なローブだったため、彼らはファンタジーで言う村人的な生活水準なのだと思うっていた。いや、人間的な基準を魔族に当てはめていいのかはまた別だけど、少なくとも富裕層には見えない。

だが、これは何だ？

「……………」

自宅だとマリアが言うこの家は、魔界らしく暗い配色の、お化け屋敷的な雰囲気漂わせる、大層デカい西洋屋敷だった。しかも立派な門には魔族の門番付きで、屋敷と門の間には、枯れてない木や、

白黒でない暗い色の花が植えられた、いやに広い庭がある。

「……あのさ、マリア。もしかしてマリアとヨシユアさんって、貴族とかそういうのだったりする……?」

「えっとね、マリアはまだ爵位っていうの貰ってないけどね、お父さんとお兄ちゃんはあるよ!」

「父が大侯爵で……私は、ここ、侯爵です。さ、さすがに父には、勝てませんから……」

勝てないとかそういうのはよく分からなかったが、とにかく、彼の父と彼は爵位持ちらしい。貴族だ、本当に貴族だこの人ら……!! 私殺されるんじゃないか!? むしろこの二人と一緒に居ていいのか!?

私は今すぐ回れ右をして逃走しようとするが、運の無いことに、門番と目が合ってしまった(この門番、目が1つだ……。)。門番は私に対して非常に怪訝そうな視線を向けるが、その隣に居た二人の姿を見ると、酷く慌ててこちらにやって来た。

「お二方、一体どちらに居られたのですか! マリア様に次いでヨシユア様までもが突然屋敷から消えてしまわれて、大騒ぎだったのですよ!?!」

「だって、おうちに居ても退屈なんだもん……」

「客人を連れて来た。人間に大層酷い目に遭わされたらしい。メイドと、念のため医者も呼んで、湯浴みの用意をさせる」

「はっ」

「お姉ちゃん、行こう」

変態という名の紳士から、今度は侯爵にクラスチェンジしたヨシユアさんがテキパキと指示を出すのに呆気にとられながら、私はマリアに手を引かれ、一生足を踏み入れることなんてなかったであろう

屋敷に足を踏み入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8857x/>

1 or 0

2011年10月26日13時09分発行